第三十一卷　第一號　三六

日本中世に於ける歴史記念物の發生とその意義

村山修一

一　序言

第二次世界大戰の終結は、日本に於て第二次の明治維新を要求しつゝある。或ひはこれを、今迄屢々用ひられた昭和維新の言葉でもつて表現してもよい。眞の昭和維新は今こそ到來したのである。三百年に渉る封建制度の下に深く根を下した國民思想は、明治に於ける政治經濟的大轉換にも拘らず、根本的な改革をみずして終り、遂にそれ自體、破端を生ずるまで時代逆行的な姿を維持し續けたのである。尤も現在叫ばれつゝある自由主義・民主主義等は、すでに明治維新當時、盛んに唱導せられ、一部には實現もせられたのであつたが、急速なる外國文化模倣と日本的傳統に對する正鵠なる認識の欠除が、維新による國家改革の前途を漸次阻害するに至り、極端なる觀念論を以て現實を歪曲し、生活と思想を全く遊離せしめる狀態に追ひやつたのである。彼の神懸り思想や神祕的軍國主義の如きは、何等日本的傳統から生れたものでもなければ外國文化の寄與により成立したものでもない。謂はゞ明治維新が消化し切れなかつた封建的思想の殘滓が變形した怪物に他ならない。

かくて吾人は、明治時代の人々が意識し自覺した問題の多くを、再び反省しなければならぬ運命に立至つた。しかし勿論それは、その當時と同じ意味に於て云はれるのではない。第一に多くの領土を喪失して維新前の狀態

に立ち還つた現代の日本は、新たに世界に目を開き、政治的にも雄飛せんとする希望を漲らした明治日本とは、同一の地理的廣さ同一の文化的領野を以て考へることは出來ない。人口は膨脹し、生活樣式は變化し、世界から受くる恩惠は、前後全く隔絶してゐる。のみならず、國力の完全なる消耗は、人間の生存に脅威を與へ、あらゆる希望は虐げられて、自暴自棄的、破壞的な氣風は滔々として社會を壓し、まさに文化人たる世界からも脫落せんとする危機にさらされてゐる。自らを反省するには餘りにも深刻な現實が控へてゐる爲、その意義すら見失つて、たゞ一途に自己嫌惡に陷れる傾向なしとしない。あらゆる傳統は、このいたましい現實の責任者たる如く考へられ、歷史を振りかへることは、時代錯誤に陷れる如く思惟する者が社會の一部にあらはれ始めてゐる。しかし、かうした非歷史的態度こそ、今回の破局を齎した最大原因であることを正しくも感知した人は、却つて、より一層の鋭い批判と省察を我々の過去に對して投げかけるであらう、たゞにそれは學問的方法によるのみではない。戰爭によつて生起し、或ひは破壞し、或ひは變形せしめられた目前の數々の事物から與へられる感情的な衝動は、今迄吾人の歩み來つた過程への追憶を常に感覺的な面を通じて要求し續けるに相違ない。戰爭の直接的な慘禍よりは全く免れた田村を廻つても、避け難い風景は、蒼蒸した墓地に新しく聳える戰死者の忠魂碑であり、神社の拜殿を賑はしめる武運長久の貼札である。さらに廣く目を轉ずれば、資材增產の爲、伐り盡されて相貌を變じた田肌、工場疎開の爲、一朝にして追放された自然美の如き好適の目標がある。況んや都市に於ける夥しい數々の破壞された建物の殘骸は、當分戰爭の歷史的慘害を物語る代表的記念物となるであらう。我々は一日も早くかうした記念物を抹殺すべく努力しなければならぬと同時に、人類幸福に資する爲に、この記念物をさらに文化的な姿で遺すことに留意しなければならない。

蓋し歷史的記念物の保存せらるゝ點では、從來より日本は世界有數の國柄であつたと思ふが、有史以來の冷酷なる現實と、如上の深き歷史的反省との關聯を思ふとき、

吾人はわが國に於ける歴史的な歴史記念物の存在が、何故必要であり、意義があつたかを、つく〴〵考へさせられざるをえないであらう。國民精神作興の手段として利用せられた史蹟名所が、結局軍國思想鼓吹のお先棒を擔いだものと判斷せられた結果、世間的な人氣を失墜し、その存在を見捨てられたのも無理はないが、事實は却つて本來の歴史的尊嚴を蘇らしめ、眞の姿へと純化せられて行つたのである。徒らなる觀念論の材料にそれらが利用せられたのは極く最近に限られたのであつて、過去の日本人の生活が長く如何に豊かな思想と感情をそれから供給され惠與されてゐたかは、今こそ最も深く檢討しなければならぬ時期に際會してゐるのである。

二　文學的遺蹟の諸相

(一)　歴史記念物としての名木

歴史記念物の最も原始的な形は、自然の一部を他から區別し、これに歴史的な意義を與へることであるが、上古にあつては、かゝる操作が何等かの信仰的な雰圍氣の中に行はれるを常とし、惹いて自然に於ける神の信仰と深き關聯あるを思はしめるのである。神龜元年、聖武天皇が和歌浦の靈を祭られしに徵しても明かな如く、景勝の地は、すでに一個の神格を具へた淨域として取扱はれた。さうして、その自然的な特殊性は、神の個性として觀念せられ、神話に於ける數々の傳承は、この神を通じて自然の上に具象化せられ、それが歴史として記憶せられたのである。勿論神話は現實の自然を基礎として成立したものではあつたが、神話の歴史的な發展は、又逆に各地の自然をして歴史的記念物たらしめる役目を擔つた。これは結局、各地の社會生活が、同類型の歴史的經過をとれるに基づくが、歴史的自覺の高まるにつれて、さうした自然的歴史記念物は、地域的な特殊性の下、新しい時代粧を裝ふに至つたのである。即ちそこには、感情的な自然の魅惑と、歴史的な人間の反省といふ二つの要素が相纏綿し、叙事詩的な色彩を強くするか、叙情詩的な傾向を重くするかによつて、のち史蹟と名所の別が立てられたのである。勿論記念物には兩者を併せ有する

場合も少くない。

上代のことはしばらく措き、政治的混亂最も屢々起つた中世に於ては、世相の變轉もおのづから目まぐるしく、それだけ一方では破壞されゆく古き文化への愛著が強く發現したのであつた。即ち史蹟名所の歴史はこの時代に最も大きな變革を受けてゐるのである。たとへ戰亂の被害を受けない土地にあつても、時代の推移は兎角さうした文化的意義を曖昧にしゆくものである、特に吾人はこれを文學的な歴史記念物について多く認めるであらう。文學的と云へば自然、叙情的な要素の多いことが想像され、史蹟よりは寧ろ名所として親しまれ易かつたのである。さて一般に記念物を象徴する最も自然的且原始的事物は樹木であるが、名所に於ては殆んどこれが欠くべからざる要素となつてゐた。木によつて傳へられた名所の歴史的傳承を、僧侶は「草木悉皆具有佛性」の理で以て木の靈みづからの告白・懺悔内容として說き廻つたのである。やがてこれは謠曲の構想へと取り入れられ、巧みに藝術化されたのであつて、以下少しく有名なものにつきこの關係を論じてみよう。

彼の北野社では上古松を神木としてゐたのが、菅公の靈威あらはれしのち、梅をも神聖視する樣になり、やがて各地に於ける天神社の分祀とともに松梅の名木を諸在に出現せしめた。就中有名なのは、安樂寺の飛梅と老松で、平家太宰府に落ちた頃は、名木の所在すら明かならざる狀態であつたが、降つて謠曲「老松」では

諸木の中に松梅は、ことに天神の御慈愛にて、紅梅殿も老松も皆末社と現じ給へり

といひ、神木として垣を廻らし、或ひは白木綿を懸けて特別の保護が加へられてゐた有樣を述べてゐる。然るに天正八年頃に至つて火災のため、無殘な有樣となつてしまつた。「九州道の記」に、

宰府は天神の住給ひし所と聞及しまゝ、見物のためまかりける、彼宮寺は七とせばかりさきに炎上してかたばかりなるかり殿あり、舊跡の有樣松杉のおほくきられたるに、さすがに所々にのこり、うしろは青山そびえて右の方七八町ばかりも有らむとみえて觀音寺あり、

寔に西都ともいふべき所なり、飛梅も古木は燒てきりけるに、若ばえの生出て有をみて

云々と記してゐる。近くの竜門山寶滿寺が戰場となつたといふから、その禍が及んだのかもしれない。さらに難波の梅は家持詠ぜし以來有名となり、（謠曲「難波」）生田川の簾の梅は、梶原景時父子一枝折つて簾にさし、笠印となりて功名殊にあらはれた由緒のため、「名將の古跡の花」（熊）として愛せられた。北野の紅梅と同樣、古き歴史を有する鶯宿梅は、下學集に、

二條京極林光院是也

と所在が明かにされてゐるから、室町時代なほ訪れて面影を忍ぶ人々もあつたのであらう。言繼卿記（天文元、二、廿一）には、

岡御所へ鶯宿梅見物參、近來見事也、白梅之内あまた紅梅相交、二枝一圓紅梅也

と紅白とり〴〵なる開花を賞した記事が見える。

梅に劣らず、松もその歴史的な古さを保ち易く、住吉の松は如何しか尾上の松と並び相生の松と稱せられたのみならず、尊氏の叛謀以來、戰場の古蹟として長く後人詠歌の標識となつた。九州博多の箱崎の松は、中世驗ノ松と云はれ、昔、神功皇后、戒定惠三箇をこの地に埋み給ふた驗に植えられたものと稱する樣になつた。其後神殿は文永年間二度、弘安年間一度の回祿を經て、永享六年七月十八日、大内少貳兩軍の戰場となり、神體共に燒失の上、このシルシの松も炎上したのであつたが、其後約三ケ月を經て、この燒松の傍より小松一本生え出づるの靈瑞ありと、社家より京都へ注進に及んでゐるから、全く枯れなかつたのであらう。①

一方櫻に眼を轉すれば、華かなだけ名木として知らるゝものは一段と數多く、都の周邊では、近衛殿絲櫻・毘沙門堂櫻・嵐山の櫻・黑谷の櫻・千本の櫻・華頂山の櫻・清水地主櫻・西山西行櫻（以上謠曲「西行櫻」）深草の櫻（「墨染櫻」）など、すでに親しみ深く、西行法師は殊に櫻を愛せるところから、各地の名木につき事蹟が傳へられてゐる。臥雲日件錄（康正三、三、十七）によれば、常在光寺②には、墨染櫻として西行栽えし樹なほ生育せりといひ、彼の詠

歌の題材となれる櫻花の名所については、吉野・熊野・志賀・廣澤・交野・神地山等がまづ信據するに足るべく、東山雙林寺を最後の觀賞地と傳へらるゝのである。さうして夫々の地に遺された歌は、恰も名所の特殊な性格を表現するかの如く後人に傳承されたのであつた。同じく臥雲日件錄(享德四、正、七)に、

一華來因話、去春城南深草小菴看花之事、古歌深草野邊櫻ヲ有ラバ心此ノ春許墨染ニ發、一華曰、此歌深草院崩御時、孤臣某詠レ之也、或爲二西行作一非也、花神多託二某人一曰、改二此春許一作レ自二此春一可也云々

と、花神現じて自ら名所の歌を評した風雅な傳說が語られており、謠曲「墨染櫻」はさらに花神の言葉として、

此の櫻は、舊院の御愛木、花の新に開けし日は、初陽潤ふ御顏も悅ばせおはしまし、鳥の老いて歸る時、薄暮くもれる御氣色、無常の嵐吹き來り、花より先に散り給ふ、心なき草木も歎きの色に出でざらん、此の春ばかり墨染に咲けとの詠は恥かしや

と述べてゐる。また、落ちゆける忠度の、

さゝ波や志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かな

の句は、悠久變らざる自然の風情こそ、世の隆替をうつしとゞむる歷史的記念物たることを表白したもので、謠曲「志賀」の前段で

人間万事さまゞの世をわたり行く身の有樣、物毎に遮る眼の前、光の影をや送るらん

と述べた樵夫は大伴黑主であつた。而も彼は、

その古は大伴の黑主といはれしが、時代とてこの山の神とも人や見るらん

と何時しか花神にあがめられたのである。「西行櫻」では、西行の作と稱する

花見むと群れつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける

の歌にひかれて花の精あらはれ、咎こそ人にあつて樹になしと申し開く仕組になり、西行の靈は出て來ない、蓋し彼こそ上古以來の諸名木に名所としての生命を喚起せしめたワキ方であつたのである。有名な吉野千本の櫻は風流人による移植が屢々行はれ、入道信西の子藤原成範

はそのゆゑに櫻町中納言又は櫻待中納言と呼ばれた。樋口町の四方に櫻を植ゑ、その中に邸を建てゝ住んだが、特に心を寄せた木のはかなく散りゆくを惜しみ、泰山府君に祈つて花の齡を延べたといふ。謠曲「泰山府君」に、泰川府君みづからが、

我人間の定相を守り、明圖二つを守護する處に、上古にも聞かざりし、花の命を延べん爲我を祭る

と驚いた樣に、この泰山府君祭は、櫻の歴史に一つの先蹤を與へたものであつた。京都千本の櫻も、移植によつてその名を得たかと思はれ、③室町時代には、八重櫻を賣買する商人が住んでゐた程である。④入道信西が創めたといふ千本安居院坊では、庭前にもと二本の名木があつたのを、同寺の良舉法印これを伐れるため、木の靈に取殺されたと、應永頃同寺の心兼法印は語り、房の傍にある社は、良譽の女阿波內侍が祈謝して創めたところと說明してゐる。⑤木の祟りは別段珍しいことではないが、名蹟の破壞に對する制裁には、また別な歴史的威力の發現を考へねばならないのである。謠曲「嵐山」では、

そも嵐山の千本の櫻の神木たるべき謂れは如何に

との勅使の問ひに對し、

名におふ吉野の千本の櫻を移し置かれし其の故に、人こそ知らぬ折々は、木守勝手の神ともに、この花に影向なるものを

と答へ、

取りわき花の名所とは、何とて定め置きけるぞ

との尋ねに、

それこそ猶も神慮なれ

と應じた。名所の意義は神意が始めて地上に出現したと信ぜられる古へに溯ることによつて明かとなるであらう。

(二)　都の名蹟

名木についての概觀を了つた吾人は、次に是等を含む諸遺蹟の展開へと歩を進めなければならない。云ふまでもなく一木一草に至るまで數々の傳說・由緒を有つた平安京の如きはその中心であり、中世に於ける地方人の大

きな憧れは、是等の由緒を巡歴するにあつたとするも過言でない。いま拾芥抄載するところに從つて當時の主なる名蹟を掲ぐれば、道眞の住居たりし菅原院・紅梅殿・天神御所、紀貫之の寓居たる櫻町亭、橘逸勢の蚊松殿、融大臣の河原院、六條院の海橋立は特に有名で室町期まで遺構が傳へられた。千本の兩歡喜寺には定家の時雨亭、式子內親王御石塔の定家葛あり、和泉式部については東北院に手づから植ゑし軒場の梅、墓所と傳ふる誓願寺の石塔名高く、小野小町に至つては四ノ宮・市原・鳥羽など諸方に墓と傳ふる遺蹟を分布せしめており、なほ後段にも少しく述ぶるところがあらう。源氏關係では嵯峨野宮の六條御息所の住家、紫野雲林院、紫式部の墓や夕顏の宿、三條京極の空蟬が宿、河原院に近き夕顏の假寓、一條大宮佛心寺なる桃園宮など、中世人、分けても僧侶達が強き上古への憧憬を以て舊蹟の傳承に努めたことは、謠曲を通じても充分窺ひ知らるゝのである。紀貫之・在原業平・周防內侍等の家は、中世初頭すでに往時の面影なく、位置のみ無名抄にかく記されたにすぎなかつた。

一、或人云、貫之がとしころすみける家のあとは、かでのこうぢよりは北、とみの小路よりは東のすみなり

一、業平の中將のいへは、三條坊門よりは南、高倉より西に、高倉おもてに近比まで侍き、柱なども常にも似ず、ちゝまき柱といふ物にて侍りけるを、いつ比の人のしわざにか、のちに例のはしらの樣にけづりなしてなん侍し、なげしも皆まろに、かどもなく損なりて、誠に古代の所と見え侍き、中比晴明がふうじたりけるとて火にもやけずしてひさしく有けれど、世の末にはかひなくて一とせの火にやけにき

一、周防內侍が我さへのきのしのぶ草とよめる家は、冷泉ほりかはの北とにしとのすみなり

應仁の大亂に、市街の大半荒廢してよりは、廢墟の中に空しく取り殘された是等舊蹟に對する感傷的な追慕は一段と強く、それは獨り風雅な人士の心境に限られた特殊な詠歎として表現さるべきものでなかつた。應仁記(卷三)の掲ぐるところによつて知らるゝ兵火の被害を免れた數々の名蹟も、所領檀家始め諸方面からの援助を絶たれて

は經營維持も困難となつたであらう。要するに都に於ける舊蹟には、自然よりも人爲的な建築物の中心となる場合が多かつたゆゑに、その隆替も田舍に比して遙にめまぐるしかつたのである。

(三) 京都周邊の舊蹟

然らば都市より離れた鄙の名蹟は如何樣な推移を辿つたであらうか。まづ京の周邊より始めて漸次觀察を地方へと擴げてゆきたい、手近な所では上世以來幾度となく盛衰を重ねつゝ眺望の佳なると位置の要衝たるとから忘れられることなく受け繼がれた逢坂の關が指摘されよう。こゝに古くは關明神の祭祠及び關寺が營まれ、山の崖には、丈六の荒彫⑥あつて、宗教的にも人の心を惹いてゐたが、何時しか荒廢し、寺院は三寶院本諸寺緣起によれば治安元年七月九日、僧延鎭により堂舍再興され、土中に埋れた石佛藥師一體が發見され、また別に木像を新作し翌年漸くにして舊觀に復するを得た。同寺の迦葉佛が牛の化身だとて騷がれたのは、この時の話である。其後再び退轉したのが、治承三年、中山忠親は關寺建立の勸進聖に靈山邊で會つたといふ記事が山槐記に見え、海道記によれば、關寺の門前に金剛力士の像が立つたといふから、鎌倉時代には、さらに寺の偉容が備つたのであらう。次に關明神については無名抄に、

會坂に、關の明神と申は昔の蟬丸なり、かのわらやの跡を失はずして、そこに神となりてすみ給なるべし、いまもうち過るたよりによれば、昔深草のみかどの御使にて和琴ならひに良峯宗貞とてかよはれけんほどの事までも、おもかげにうかびていみじくこそ侍れ

と蟬丸の遺蹟に結びつけ、源平盛衰記(卷十四)は、天武天皇を助け奉つた關の長者を祭るとしてゐる。長明は無名抄の中で更に關の清水の所在に及び、

ある人のいはく、逢坂の關のしみつといふは走井とおなし水をとなへては人しれり、しかにはあらず、清水は別所に有、今は水もなければ、そことしれる人たになし、三井寺に圓寶房の阿闍梨といふ老僧たゝひとり其所をしれり、かゝれとさる事やしりたると尋る人も

なし、我しゝて後は、しる人もなくてやみぬへきことゝ人に逢て語げるよし傳へきゝて、かのあさりしれる人の文をとりて建暦のはしめのとし、十月廿日あまりの比、三井寺へ行、あさりにたいめんしていひけれは、かやうにふるきことをきかまほしくする人もかたく侍めるをめつらしくなん、いかてかしるへつかまつらさらんとて、ともなひてゆく、闘寺より西へ二三町はかり行て道より北のつらに少したちあかりたる所に一丈はかりなる石の塔有、そのたふの東へ三段はかりくたりて、くほなる所は、すなはちむかしのせきのしみつの跡なり、道よりも三段はかりや入たらん、今は小家のしりへになりて當時は水もなくて見ところもなけれと、昔のなこりおもかけにうかひて、いうになんおほえ侍し、阿闍梨かたりていはく、この清水にむかひて道より北にうすひはたふきたる家ちかくまて侍けり、誰人のすみかとはしらねと、いかにもたゝ人の居所にはあらさけるなりめりとなんそかたり侍し

と詳細に實地踏査の結果を報告してゐる。蟬丸の遺蹟も闘清水の跡も、かくして中世初頭、徒らに名のみ高く、現實は既に湮滅に瀕してゐたのであつた。そればかりでなく、他に當時歌仙として追慕された人々の遺蹟も、斯道に深く志ざせる輩でなければ、確かにそれと知られぬ場合が多くなつてゐたのである、長明の如き篤志家が、丹念に其等を詮索し、記錄したことは誠に幸であつた。

同じく無名抄に、

或人云、たなかみのしもに、そつかといふ所あり、そこに猿丸大夫が墓有、庄のさかひにて、そこの券にかきのせたれば、みな所レ知なり

庄境にあつたればこそ、この様に記錄の上で忘却から免れてゐたので、單に歌人としての猿丸大夫ならば、墓の如きは早く不明に歸してゐたであらう。次に、

志賀の郡に、大道有、是よりすこし入て山際に、黒ぬし明神と申神います、これはむかしの黒主神となれるなり

といふのは、勿論土俗の說であつて、この祭祠を史蹟たらしむる力は、最早信仰以外に何もなかつたのである。

人丸の墓は大和國にあり、はつせへ參る道世、人丸の墓といひて尋るには、しれる人もなし、かの所には、

うたづかとぞいふなる

土俗の傳承は、この樣な狀態にあるのが眞實で、人丸が如何なる人か知らなかつた人さへあつたと思ふ。そのため清輔は親しく石上の歌塚に詣でゝ遺蹟の顯彰を行つてゐるのである。卽ち顯照法橋の柿本人丸勘文に、

墓所事

考二方葉一人丸於二石見國一死去了、其間和歌等、度々前註了、而清輔語云、下二向大和國一之時、彼國古老民云、添上郡石上寺傍有レ杜稱二春道杜一、其杜中有レ寺、稱二柿本寺一、是人丸之堂也、其前田中有二小塚一稱二人丸墓一、其塚靈所而常鳴云々、清輔聞レ之祝以行向之處、春道杜者有二鳥居一柿本寺者只有二礎計一、人丸墓者四尺計之小塚也、無レ木而薄生、仍爲二後代一建二卒都婆一、其銘書二柿本朝臣人丸墓一、其裏書二佛菩薩名號經教要文一、又書二予姓名一、其下註二付和歌一

世をへてもあるべかりける契こそ

苔の下にも朽せざりけれ

歸洛之後、彼村夢咸云、正衣冠之士三人出來拜二此卒都婆一而去云々、其夢風二聞南都一知二人丸墓決定由一云々

とその消息を詳しく述べてゐる、他方、播州の遺蹟については、增鏡（第十六）の後醍醐天皇隱岐御潛幸御道中を記しまつゝた條に、

はりまの國へつかせ給て、しほやたるみといふ所おかしき所をとはせ給へは、さなんと奏するに、なをきくよりからき道にこそとのたまはせて、さしのぞかせ給へる御さまかたちふりがたくなまめかし○略中大くら谷といふ所すこしすぐるなどにぞ人丸のつかはありけるといひ、三國傳記（卷六）には、西行が播州の墓所に於て人丸の靈に會つた話を載せてゐる。

既ニ幡摩路ニ懸リケルニ、人屋遠キ野原ヲ分ケ入、日已ニタヘナリ、○略中西行宿ヲ尋ルニ松一ト村ノ陰ニ尖頭ノ柴ノ戸アリ、内ニ白髮タル老翁一人坐ノ夕ノ月ニ嘯ケリ、西行立寄テ宿ノ借ルニ荒タル廬ノ習ナレハ窻ヲ閉テモ月ヲ待、落葉ヲ捨テハ風ヲ燒キ、最幽ナル栖居ナリ、

草ノ廬リ草枕、苔ノ衣苔筵、旅寢ノ殊ニ物哀ニテ○中略夜既ニ明ケヌレハ主モ不レ見廬モナシ、西行野キハノ里ニ歸テ人ニ問ニ其當リニハ無ニ人ノ栖家一被ノ松原ハ人丸ノ墓所ナリトモ云傳ヘタリトソ答ヘケル、サテハ彼ノ老人ハ人丸ニテヲハシケルニヤト、日來ノ本望滿足シヌル○下略

この頃明石に於ても人丸の遺蹟は明確なものなく、たまたま訪れた文雅の士は、自然の風光に歌仙の面影を忍ぶのみであつたのである。人丸と並んで遺蹟が多いのは在原業平であらう。人口に膾炙せる彼の作、

世の中に絶えて櫻の咲かざらば、春の心はのどけからまし

が詠ぜられた渚の院の遺蹟は、承平の頃紀貫之が訪れたとき、既に櫻なく、松と梅のみであつたといひ、河内國高安里の彼が通ひしところも鎌倉時代初頭、地名によつて僅かにそれと稱する傳承地があるのみであつた。

河内國高安郡に在中將のかよひすみけるよし、かのいせ物がたりに侍り、されどそのあとはいづくともしらぬを、かしこの土民の說に、そのあとさだかに侍りとなん、今中將がきうちとなづけたる、すなはちこれなり

と無名抄は說明してゐる。同時に高安通ひの頃住みし大和石上の邸址といふ在原寺は、荒廢し乍らも室町時代まで遺存してゐた。平安時代後期には、石上寺の名で知られてゐたが、更級日記の著者の訪れた頃は、早くも昔日の面影がなかつたといふから、現地遺蹟の速かなる湮滅に比し、中央では口傳を通じてのみ長く知られたのであらう。加ふるに都の三條坊門邊には、彼の住家と稱せられるのがあつて、鎌倉初頭まで存在してゐたこと、既述の無名抄の文よりして明かであらう。

而も戰亂の波及を被らなかつたに拘らず時代の推移の前には「かひなくて」遂に湮滅に歸したのであつた。喜撰法師については、

みむろとのおくに、廿餘町ばかり山中へ入て、うぢ山の喜撰がすみける跡あり、家はなけれど堂の石すへさだかにあり、是などかならず〳〵尋てみるべき事也

といひ、やがて埋れんとする史蹟の運命を暗示してゐるのである。謡曲「頼政」では、

喜撰法師が住ける庵は、何くの程にて候ぞ

との問ひに對し、

されば こそ大事の事をお尋ねあれ、喜撰法師が庵は、我が庵は都の巽しかぞ住む、世を宇治山と人はいふなり、人はいふなりとこそ主だにも申し候へ、尉は知らず候

と答へ、室町時代、確として遺蹟の不明であつた實情を傳へてゐる。源氏物語に薫中將の通つたと云はれた浮舟の住居は矢張りこのあたりと信ぜられ、のち彼女の移つた西坂本の小野も、跡をたづねて訪れる人士があつたのである。(謡曲「浮船」) 降つて長禄記は、

其後喜撰法師此宇治山ニ隠居シテ草木國土皆歌ニ通ズ、中ニモ柳ヲハ橋姫明神ノ神木ト號テ貴賤是ヲ賞翫

と、この地の一木一草盡く山緒縁起に飾られた名物であることをのべたが、就中優雅な柳の姿態に、橋姫傳説が聯想された次第を説いてゐる。この傳説は、袖中抄が云

ふ様に、平安時代は離宮明神との戀愛傳説であつたものを、怨靈思想の影響の下に、離宮明神の方は藤原忠文の靈となり、橋姫は恐ろしい鬼女と考へられて渡邊綱の武勇譚と結びついた。蓋しそれは名所に對する歴史的意味の附與であり、離宮明神及び橋寺に於ける縁起成立の一役を荷つたものにすぎない。このことは數多い小野小町の遺跡について一層よく理解されよう。逢坂の關寺邊には、百年の姥となつて住める址あり、(謡曲「鸚鵡小町」)關寺小町)上述洛北の市原野は、彼女の庵ありしといひ(謡曲「通小町」)その生誕地を廻國雑記に、

(相州)熊野堂といへる所へ行きけるに、小野といふ里はべり、小町が出生の地にて侍るとなん、里人の語りはべれば、疑はしけれど、

色みえてうつろふと聞し古へのことばの露か小野の淺ぢふ

死沒の地を吉事談(第二)に、

業平關東に下り、奥州八十島に宿れる夜、野中に髑髏あり、小野小町こゝにて死せる所と傳へ件所を小野と

云へり、

と記せるが如き、皆、小野に關する史實の傳承亡べる後、中世人が新たに作り出した遺蹟であり、「小野」なる地名を故人に附會せしめて名所を歴史的に意義づけんとした意圖を看取するのである。宗祇が「淺茅生のをのゝしの原忍ふとも」云々の歌の小野を名所に非ずとしたのは⑦、歌道の上の話に止まり、地名の附會によつて忘れられた土地の歴史を飾らうとした地方人には、一個の史蹟と觀ぜられたかもしれないのである。小町の傳說的な生涯については、鎌倉時代、玉造小町壯衰書や小野小町一期盛衰事を圖せる繪卷⑧などがあらはれて人の興をそゝつた。小町の他に、小野といへば篁を聯想し、その故郷と解して地名をも別にたかむらと稱した安藝の一山村の如きもあつたのである。⑨かくて長明が日野の閑居地も、重衡笠やとりの跡とともに、室町時代には宗長が懷舊の情を新たにした遠き昔の遺蹟となつてしまつたのである、⑩また彼の鎌倉に近い大倉山は、櫻に限らず、山水形勝の地として幕府創立以來急に知られたところであり、源實朝はこゝに堂舍を建て、京都より善信を召下してその風光を寫さしめたのであるが、かくこの地が喧傳せらるゝ背後には、上代歌人との歴史的關係が信ぜられてゐたこと、善信より將軍への上申が左の如くであつた事實から推測されるであらう。

去建久九年十二月之比、夢想云、善信爲二先君御共一赴二大倉山邊一、爰有二一老翁一云、此地清和御宇、文屋康秀爲二相模掾一所レ住也、可建二精舍一我欲レ爲二鎭守一云々、夢覺之後、上二啓此由一、于レ時幕下將軍御病中也、忽催二信心一若及二御平愈一者、可レ有二堂舍造營一之由、被レ仰之處、翌年正月蕊御、不レ被レ果之條、愚意潛爲レ恨而當代依二自然御願一有二此草創一、併靈夢之所二感應一也

と、この地に於ける康秀の事蹟が、如何程信ぜらるべきかは知るべくもないが、名所の發生が一部人士に信ぜられた歴史傳承を契機とする場合のあることを、これからよく領けると思ふ。

一方、上代より名所として知られた嵯峨小倉山では、嘉禎元年五月、宇都宮頼綱の招聘により、藤原定家が嵯

峨中院第の障子の色紙形に、百人一首を記し、爾來この地を歌名所として一段と世にあらはしめるに至り、後、常寂寺内に色紙の障子保存せられ、近世に入ては百人一首を撰べる時雨亭の址に、定家を祠る樣になつた。[12] 宇多野双丘東麓には、吉田兼好が風雅の生活を送つて丘に五位を授けられし昔を忍び、少しく西なる常盤みこしの岡は、醍醐天皇嵯峨行幸の際の御註輦所として、當時嵐山大堰川に遊ぶ人士の、心に留めた由緒地であつた。[13] 嵐山に於ては、昔橘皇后建て給ひし檀林寺の礎の址といふ所に、後嵯峨上皇龜山殿を營んで特に紅葉を賞し給ひ、室[14]町時代には高雄及び西芳寺も紅葉の名所として屢々貴人の訪るゝところがあつたのである。[15]

(四) 地方の諸遺蹟

轉じて浪速の海岸に目をやるならば、須磨・明石より住の江にかけての一體は、中世初頭最も華々しい戰場となり、多くの名所には、武勇談や哀史をその由來として附與したのである。須磨に於ける在原行平閑居の址、光源

氏の舊跡を記念する若木の櫻、須磨の關址、有馬では善福寺の前に、孝德天皇行宮の地と傳ふる聖蹟あり、臥雲日件錄(寶德四、四、廿四)に、

昔孝德天皇行宮之地、今謂二之御所墻内一又天皇月夜、宴三于寺前尊橋一、有二歌詠之辭一、世皆傳レ之

といひ、よく古傳が保存されてゐるのである。東に移つては布引の瀧、萬葉以來知られた求塚松では尾上の松、雀の松原、みかげの松、昆陽の松、生田の森、難波浦では大和物語のあしかり男夫婦の住家址があり、纔かに里人の說明を俟つてそれと判ぜらるゝのみであつた。[16] 住吉の澪(ミヲツクシ)は嚴島の有子内侍入水によりて喧傳せられ、[17] 長柄橋は人柱傳說を宇治橋姫明神の本緣と混合せしめて齊明天皇御代入水せる妻の悲話を生ぜしめたのみならず、神道集により、我國に於ける橋姫明神すべて長柄橋姫の眷屬であるとさへ說明せられた。卽ち卷七に、

橋姫明神ノ事

抑橋姫ト申ス神ハ日本國ノ内大河小河橋ヲ守ル神也、而ルニ(接州長柄橋姫、淀ノ橋姫、宇治橋姫トン申ノ其數ハ多ト申

今(長柄橋姫)ノ事ヲ明ノ自餘ノ橋姫ニ准ラヘテ申シ抑人王三十八代、帝ヲハ齊明天王ト申ス皇極天王ソノ重祚シ給シ時ノ御名ナリ、此時接州ノ長柄橋ノ懸ラレシニ人柱ノ被レ立タリシカハ、其河ノ橋姫ト成レリ、依レ之河ニテ死ル人ハ皆橋姫ノ眷屬トハ成ル也、其故ハ橋ヲ懸ル事度重ナリケレトモ、事カ行サリケレハ人柱ヲ立ヘキ由ヲ内談有ケル折節、淺黄ノ袴ノ膝ノ切レタルヲ白キサイテヲ以テ縫付タルヲ著タル男一人出來レリ、其妻ハ二三計リナル少ナキ者ヲ負ケリ斯ル處ニ、鶏ノ鳴ケル人々聞ツヽ差遣此男亦材木ノ上ニ息タリケルニヤ、此橋ノ人柱淺黄ノ袴ノ膝ノ切レタルヲ白キ衣端ニテ縫付タルヲ人柱ニ立程ナラハ相違光事行ヘシト徒ラ口ヲ立ケル程ニ橋奉行聞レ之佐テハ汝ヨリ外ニ別ノ人有ヘカラス則取縛リテ橋柱ニ被レ立、其ノ妻女夫ノ別ノ悲テ一首ノ歌ヲ讀ツヽ硯紙ヲ充テ書橋柱ニ結付歌ノ泣泣少キ者ヲハ負ナカラ身ヲ河ヘ沈ミケル、其歌云、物トヘハ、父ハナカラノ橋柱ナカスハキシモトラレサラマシ讀タリケリ、此女ハ則此橋ノ橋姫ト成ケリ、人々哀ミテ橋爪ニ社ヲ立橋姫明神ト祝ヒケル也

橋柱傳説と橋姫傳説が混淆し、歌の意味もこの様に苦しい附會をしなければ理由付けられぬ程、すべては不明に歸してゐたのである。康富記(嘉吉三、四、二)の古今集序についての論議を載せた條には、

参二伏見殿一有二御讀一、宮御方被レ語仰下云、昨日被二注下一長柄事、古今序注聞書分、并顯注密勘等也、古今序なからの橋もつくるなりとよめるは盡と造との二義あり、長久の名ある橋も盡はてぬ、わが戀はいまた緣もなめりとよめる心なり○中略又古老傳に、人柱たてられたりともみゆ、最初の事とも見えず、密勘の注には子負たる女をとらへて人柱にたてたると云へり、今程猿樂などの能には、男を人柱にたてられたりともみゆ、月長橋の事、古の歌仙も在所をは慥に不レ知云々、わたなべのあたりにかけたる橋と云々

往古行はれた架橋に於ける人柱の風習を、歌人のみは平安時代から具體的な史蹟として捉へんと空しい努力を續けてゐたのである。しかし、源家長日記によれば、人柱

を立てた昔の橋柱の端片が元久の頃、土地の住人瀧口盛房の手に傳へられ、朝廷に聞えて之を獻上するに至つたと云ひ、後この破片は文台として和歌所に置かれたと記されてゐる。（後鳥羽院の御物の文台とはこれをいふのであらう。明月記、元久元、七、十六）宇治拾遺物語（巻三）にも伯母越前守といふ歌人の話を載せて、

いまはむかし、伯のはゝ佛（供養）くやうしけり、永緣僧正をしやうじて、さま〴〵の物どもをたてまつる中に、むらさきのうすやうにつゝみたる物あり、あけてみれば、くちにけるながらのはしのはしばしら、法のために

もわたしつるかな

ながらのはしのきれなりけり、又の日またつとめて若狭あざりかく云んといふ人、歌よみなるがきたり、あはれ此ことをきゝたるよと僧正おぼすに、ふところよりみやうぶ（名簿）をひきいでゝたてまつる、このはしのきれ給はらんと申、僧正かばかりの希有のものはいかでかとて、なにしにかとらせ給はん、くちおしとてかへりにけり、すき〴〵しくあはれなることども也

といふから、古橋の柱の木片が、當時歌人の間に幾つか傳へられ、珍品として特別の贈答に用ひられたことを知るのである。なほ橋の序を以て附記するが、甲斐の猿橋でも種々の傳説があつたらしく、廻國雜記には、

むかし猿の渡しけるなど里人の申し侍りき、さる事ありけるにや、信用し難し、この橋の朽損のときは、いづれも國中の猿飼ども集りて勸進などして渡し侍るとなん云へり

とのみ述べたにすぎないが、要するに、宇治橋が天人の助けを得たといふ傳説[18]と共に、人力に非ざる架橋の傳説を通じて、なほこの頃橋に對する信仰の存在せしを窺はしめる史料となるのである。

長柄より更に名所を南に辿れば、和歌浦、吹上濱、日前國懸の古木の森がある。和歌浦の玉津島明神は、中世に入つて仁德天皇々后ともいひ、景行天皇とその皇后を祭り奉るとも信ぜられて[19]、何時しか京中へ勸請が行はれた。[20]殊に平家には風雅の公達少なからず、暇を見つけては單身是等の名所を歴覽し、詠歌や名籍の揮毫にその感懷を記念したのである。治承四年六月二日、福原遷都に

よつて近き名所に秋の月を眺めんと八月十日過、「或は住江住吉難波潟葦屋の里にうそぶき行く人もあり、或は源氏の大將の跡を追ひ、須磨より明石に浦傳ふ人もあり、和歌、吹上、玉津島、月落ちかゝる淡路島、松風はげしき高砂の波間をわたる人もあり、浦路を通ふ人もあり」(源平盛衰記)夫々の地に平和な昔を忍んだが、源氏に追はれて西海に浮ぶや、薩摩守忠度は、福原をひそかにぬけ出で有馬邊より三島江、玉川里まで足を延ばして名所巡歴を行ひ、維盛は河波より由良湊に上陸して紀州の名蹟遊覽を今生の思ひ出に濟ませたのである。

兵馬倥偬の間に於けるかうしたあわたゞしい名蹟探訪と異り、心ゆくまで鑑賞しつゝ國内を隈なく足の運びにまかせて歩いた者は西行法師であつた。彼の足跡については、源平盛衰記(卷八)にその大體を敘してゐる。

さんぬる仁安二年の冬の比、諸國修行しけるが、中比のすきものにて、東は壺の石、夷が島、西は金の御崎、松浦の沖、名所舊跡の歌枕をあゆみ、見ぬ所はなかりけり、不破の關屋に留りては、月には雲のふはと云ひ、武藏野を過ぐるとては柏木の葉守の神を恨みけり、質方中將の墓にては、一村薄を悲しみ、白河の關にかゝりでは、關屋の柱に筆を止む、四國の方の修行を思ひ立ちける時は、江口の妙の宿をかけ、假の宿と讀みしかば、心とむなと返しつゝ一夜の宿をぞ借りにけり、讃岐國へ入りて松山の津といふ所に行ひぬ、こゝは新院○中略わたらせ給ひける所ぞかしと思ひ出し○中略「御墓はいづくぞ」と問ひければ、白峯と云ふ山寺と聞きて尋ね參りたりけるに、あやしの下萬の墓よりも猶草繁し

西行物語繪詞の述ぶる順に從づて彼の行脚せる主要地を辿れば、

吉野　熊野　志賀の里　四天王寺　住吉　廣澤(山城)
大峯　やかみの王子　那智　賀茂(山城)　かた野　書寫山　讃岐松山　善通寺　法金剛院(山城)　小倉山(山城)　奈良猿澤池　中山(陸奥)　仁和寺(山城)　伊勢神地山　天龍河　富士山麓　むさし野　白川關　衣川　雙林寺(山城)

等がある。鎌倉中期以後は、かうして彼の訪れた名所・舊蹟が、そのゆゑに、また新しい緣起內容を加へて史蹟的意義を豊かならしめた。或ひはやかみ王子の社の柱に、或ひは曾我兄弟墓所の五輪に、[21]白川の關の板戸に、筆の跡をのこしたのみならず、廻國雜記に、

鴨立澤といふ所に至りぬ、西行法師こゝにて心なき身にも哀れはしられけりと詠ぜしより、此所をかくは名づけゝるよし、里人の語り侍り

とある如く、地名にさへ影響を與へ、進んでは西行谷・西行かへり[22]などの地名を發生せしめたのである。近江國番場より南すりはり峠[23]の附近にある西行法師塚といふのも、[24]彼の墓といふ意味でなく、何等かの事蹟が古墳に結びつけられた事情を示すものであらう。

西行を追慕して同じく諸國巡歴を試みたのは、鎌倉末葉あらはれた頓阿である。彼は老後、仁和寺附近に住み、前栽に各地名蹟の草木を集めて樂しんだと云はれ、室町時代にもなほその子孫堯孝僧都の手で保存せられて將軍義敎の觀賞を受けた記事が滿濟准后日記（永享三、十、廿五）に載せられてゐる。

廿五日晴、早旦出京、今日室町殿渡二御御室門跡一、御歸可レ有レ渡二御堯孝僧都坊一、可二參會一申旨一、昨日承了○中略

龍田山紅葉東面庭ニ在レ之、此紅葉計相殘了、色誠非レ如レ常、吉野櫻北向池ヨリ北ノ水際在レ之宮城野萩井手蛙等ニ至マテ所々名物堯孝高祖父頓阿時ヨリ此在所ニ移置了、干レ今相殘、希代數奇珍重、仍代々將軍爲レ御ニ覽此等名物一渡御

代々の足利將軍がこれを見物したといふから、當時有名な前栽であつたのであらう。其他謠曲の素材となつて室町時代、中央に名の知られた勝地舊蹟には、伊勢二見浦石の鏡、須磨浦なる松風村雨の松、攝津阿倍野の松虫の墓、丹後九世戸の神代の古蹟、越中多胡の浦、加賀佛の原、相模の六浦、上野佐野の船橋、磐城白河關に近き朽木の柳、陸奥の千引石、讃岐志度浦の新珠島、肥前松浦山などがある。多くは上世以來の歌名所であるが、中世には單に觀念的な想像のみでなく、科鍜行脚に託して現地を訪れる人士少なからず、その歴史的意義の累積によ

つて、さらに史蹟の新たなる發展を促したのであつた。

註①滿濟准后日記、永享六、十、八
②知恩院内にあつた寺坊を指す歟
③吉田東伍博士は、日本地名辭書（第一卷八頁）に於て、菅家御傳記の
天暦九年三月十一日、亦著二近江比良神人良種子年七歳一話曰、我昔任二右大臣一先夢下松生二我身一而便折上、是以我知下身二三公官一又遂中左遷上、既爾以レ故我欲レ居之地必當レ生松也、一夜之中松數千本生二北野一
なる記事を以て千本の地名の起源としておられるが首肯し難い。
④看聞御記、嘉吉三、二、一
⑤吉田家日次記（大日本史料所收のものに據る）
⑥更級日記
⑦實隆公記、明應五、九、廿一
⑧吾妻鏡、建暦二、十一、八
⑨道ゆきふり
⑩宗長手記
⑪百人一首口訣
⑫百首異見
⑬袖中抄
⑭增鏡、卷七
⑮滿濟准后日記、永享十四、十、十六始め數ケ所に見える
⑯源平盛衰記、卷三十六
⑰同　卷三
⑱今昔物語、卷十九
⑲神道集、卷七
⑳滿濟准后日記、永享五、八、十五
㉑應仁略記、上
㉒廻國雜記
㉓針摺峠の誤か
㉔ふじ河の記

三　戰蹟の發生と歴史的回想

中世に於ける武士の華々しい活躍は、一方に於てそれだけ彼等のはかない生涯を物語る歴史記念物を各地に殘さしめたが、就中戰場の古蹟はその尤なるものである。僧侶達にとつては、これが一般衆庶をして人間殺戮の罪業の深さを覺り發心入道せしむる絶好の素材となつたのであつて、その意味から佛家は戰蹟のよき保護者であつたのみならず、時にはそれの喧傳誇張者ともなつたのである。

嘗て平安時代、長期に渉つて朝廷を震駭せしめた前九

年後三年兩役の戰蹟は、文治五年九月、源頼朝が視察した頃、既に埋もれて詳しく尋ぬるに由なく、地名にまつはる口碑により、からふじて往時の面影を忍ぶ他ない有様であつたが、吾妻鏡に(文治五、九、廿七)に、

廿七日甲申、二品歴覽安倍頼時本名頼義也衣河遺跡給、郭土空殘、秋草鎖今數十町、礎石何在、舊宮埋今百余年、頼時掠領國郡之昔、點此所構家屋男子者、井殿盲目、厨河次郎貞任、鳥海三郎宗任、境講師官照、黑澤尻五郎正任、白鳥八郎行任等也、女子者有加一乃末陪、中加一乃末陪、一加一乃末倍也、已上八人男女子宅並レ焉、郎從等屋圍レ門西界ニ於白河關ニ爲ニ十余日行程ニ、東據ニ於外濱ニ平、又十余日、當ニ其中央ニ遥開ニ關門ニ名曰ニ衣關ニ宛如ニ函谷ニ左隣ニ高山ニ右傾ニ長途ニ南北同連ニ峯嶺ニ產業亦兼ニ海陸ニ卅余里之際並ニ殖櫻樹ニ至ニ于四五月ニ、殘雪無レ消、仍號ニ駒形嶺ニ麓有ニ流河ニ而落ニ于南ニ是北上河也、衣河自レ北流降而通ニ于此河ニ凡官照小松柵、成通貞任後見琵琶柵等舊跡、在ニ彼青巖之間ニ云々

といひ、奥州藤原氏を亡して新たに遺蹟を作らしめた頼朝が、その巡視にあたつて古き史蹟に心惹かれた有様を述べてゐるのである。のみならず、歴史的回想は更にいにしへと遡つた。

廿八日乙酉、二品專敗ニ泰衡之邊功ニ飽掌ニ後衡等歸往ニ漸還ニ向鎌倉ニ給、被ニ召具ニ之囚人、於ニ所處ニ多被ニ放免ニ之間、所レ殘卅余輩也、御路次之間、令レ臨ニ二青山ニ給、被レ尋ニ其號ニ之處、田谷窟云々、是田村麿利仁等將軍、奉ニ綸命ニ征レ夷之時、賊主悪路王、丹赤頭等攜レ屋之岩屋也、其巖洞前途至北十余日郷ニ外濱ニ也、坂上將軍於ニ此窟前ニ建ニ立九間四面精舍ニ、令下模ニ鞍馬寺ニ安中置多聞天像上、號ニ西光寺ニ寄ニ附水田ニ寄レ文云、東限ニ北上河ニ南限ニ岩井河ニ西限ニ象王山石屋ニ北限ニ牛木長谷ニ者、東西三十余里、南北廿余里云々、

田村麻呂の東征、賊主悪路王及び赤頭の住居址等が西光寺により何時頃からか喧傳せられてゐたのである。かくて文治五年九月二十一日、伊澤郡鎮守府に於て、八幡宮瑞離を奉つることゝなつた。これは田村麻呂將軍が東征の砌、勸請し奉つたところと傳へられたからで、當時寶

藏に將軍所用の弓・箭・鞭と稱する遺品を保存してゐたのである。昔、多賀に作られた「つぼの石文」も、同樣にして何時しか田村麻呂に附會せられた。袖中抄に、

顯昭云、石ぶみとは陸奥の奥につもの石ぶみ有、日本のはてと云へり、但田村將軍征夷の時、弓の弭にて石の面に日本の中央の由を書き付けたれば、石文といふと云へり、信宗侍從の申しゝは、其の所はつぼと云ふと云云それをつもとは云ふなり、私云みちの國は東のはてと云へど、えぞの島は多くて千島と云ふは陸地を云はんに、日本の中央にても侍るにこそ

とあるのは、あながち歌人の想像に出でた說と考へられない。寧ろ京都の人々は、清水寺の緣起によつて、田村麻呂の業積を傳へてゐたのである。延鎭と協力して彼の造れる將軍地藏は、東夷征伐より凱旋の際發願せるところで、一名勝軍地藏とも書かれ、甲冑を帶し、①靈異あれば雷聲を出すと畏れられたのであつた。②同じ意味で將軍塚は平安時代の困難な奥州平定を記念する戰蹟であつたと云つてよく、中世を通じてその鳴動は都人の歷史的回顧を新たにしたのである。また承元の頃までは六條坊門北に源頼義の建立せる耳納堂といふのがあつた。古事談（第五）にその由來を、

件堂ハ伊與入道頼義奥州俘囚討夷之後、所ニ建立也、佛ハ等身阿彌陀也、頼義造ニ立此佛一、恭敬禮拜シテ往生極樂必引導給ヘト申ケレバウナヅカセ給ケリ、十二年之間、戰場死亡之者ノ片耳ヲ切アツメテホシテ皮古ニ合ニ入テ持テ上リタリケルヲ件堂ノ土壇下ニ埋云々、仍耳納堂ト云也

と記したけれども、長明の發心集は、

伊豫守源頼義は、若くより罪をのみ作りて聊も慙愧の心なかりけり、況や陸奥に向ひて十二年の間謀反の輩を滅し失へる事數をしらず、因果のことはり、むなしからすば、地獄の報ひ疑なからんとみえけるに、みのわの入道とて先立て世をそむける者ありけり、折節に、此世の無常身罪の報ひの恐るべき樣などを云けるを聞て忽に發心して頭おろして一筋に往生極樂をねがひけり、彼みの和の入道が造れりける堂は、伊豫入道の家

の向ひ、左女牛西洞院也、みのわ堂といひて近くまでありき

といひ、恐らく名の由來はこの方が尤もらしい説明をしてゐる。しかし乍ら、古き戰場の血腥い幻影が、かうした訛傳となることは當時他にも例が見出されるのであつて、同じく長明の書いた四季物語、八月放生會の條に、

いけるをはなつ御神わざも、此頃に思ひなさるれば、氏の公卿の家の內おもひやるもむつかしかりぬべし、此いけるをはなつと云事、むかしの此御神のいろはのみことといみじうめの神なれど、心ざしおしうてあまたのゐびすみつのから國の內に有るとあらゆるをたいらげおはして、其國にてきりとらせ給ふゐひすのみゝをことゞく此御國にもたせおはしてやはたの神にもみそなはし給ふて、つくしの前田といふ所に、大きなる墓をきつかせ給ふてきりみゝといへり、いまあまりてきりみ堂といふなるべし

と筑前のきりみ堂の由來を擧げてゐる。やがて寄せ來る元寇に、再びゐびすの夥しい屍は、この地に葬られねばならなかつた。のち豐臣秀吉朝鮮に部下を派するや獲得せる異人の首級は蒐めて京都大佛殿西側の耳塚に埋めたと云はれるが、[33] これも何故耳塚の名を用ひたか明確な説明はされてゐないのである。

前記賴朝の巡視した奥州平泉の舊蹟は、彼の死後十餘年を經て、漸く藤氏三代に對する人々の歴史的回顧を高めたらしく、建保元年四月四日、尼將軍政子が平泉寺堂塔修復を命じた事情について、吾妻鏡は左の樣に述べてゐる。

四日乙亥、陸奥平泉寺塔破壞之事、可レ勵二修復儀一之旨、今日以二相州奉書一被レ仰二彼郡內地頭等一、是甲冑法師一人入二于尼御台所去夜御夢中一、平泉寺陵廢殊遺恨、且爲二御子孫運一令レ申之由云々、令レ見御後及二此儀一云々、三日者秀衡法師歸泉日也、若彼靈魂歟、著二甲冑一之條、有二不審一之由人々談レ之云々

恰も秀衡の命日に當る夜のことであり、甲冑を帶して來り現じたといふところに、政治的敗者としての心境から、長きに渉つて榮えた奥州藤原文化への歴史的追慕の聲を

聽かうとした一部の要求があつたことを知るのである。藤原文化の舊蹟は、取りも直さず藤原氏滅亡の戰蹟に他ならず、その意味に於て平泉寺の修復保存は、生々しい過去の再現を求める新たな緣起的歷史の成立に、精神的動機を置いてゐたといふことが出來よう。

かく戰亂が文化の中心に波及することは、これよりさき、保元の亂によつて火蓋が切られたけれども、この方は文化的な災禍少くして、寧ろ精神的動搖大であつた。即ち源爲義始め多くの幼き子息達の首や北方の遺骨は、粟田口の圓覺寺に送られ、此處に墓を營み、卒塔婆を建てゝ供養せられ、主謀者賴長は奈良般若寺野に葬り去られて凄慘な戰場の遺蹟は、何時しか都人の往還雜踏裡に消えて行つた樣に思はれたのである。然るに保元物語(卷下)は、崇德上皇讃岐御潛幸のため、京都御出發後の怪異として、

新院仁和寺をいでさせ給ふ御跡に、不思議の事ありけり、淸盛義朝洛中にて合戰すべしとて源平兩家の郞等、白旗・赤旗をさして東西南北へはせちがふ、今度の合戰思ひのほか早速に落居して諸人安堵のおもひをなしてかくしおける物どもはこびかへす所に、又此物怨出來たれば、「今日こそまことに世のうせはてんよ」とて上下あわてさわぐ、大臣公卿馬車にて內裏へはせまゐり給へば、主上おどろきおぼしめして兩方へ勅使をたてられていはく、「各存ずる所あらば奏聞をへて聖斷をあふぐべき所に、兩人忽に合戰に及ばんずる條天聽におよぶ、仔細何事ぞ、はやく狼藉を止むべし」と云々、

兩人ともに跡かたなき由をぞ勅答申さる

と記した。文學作品に有り勝ちな豫言的構想であると一蹴しえないでもないが、戰後に於ける修羅の幻が洛中を馳驅し、市民の夢を驚かしたことは有りうべきことであつた。義朝と淸盛の確執がすでにこのときあらはれてゐたといふ反證を、この記事は果して示唆せるか否かいま論議する必要はない。問題は、遺蹟の發生が實はかうした幻影の橫行するところに最も生じ易きことを知れば足るのである。治承元年崇德院の御追號あつて「むかし合戰ありし大炊御門がするの御所の跡」に、社を建てゝ祭

つたのは、その一つのあらはれであつた。一方讃岐でも仁安三年冬の比、西行法師は白峯の御墓に詣でゝ御不遇なりし御境涯をしのび奉つてゐるのである。壽永三年源範頼同義經の軍勢宇治勢多に迫り、木曾義仲平氏と和してこれに當らんとすとの風聞行はれ、京中の人心動搖するとき、保元の亂に參加せる人々の靈託しきりにあらはれ、同年四月十五日に至り、崇德院社は春日河原に遷宮を行はるゝに至つた。時に上卿を民部卿藤原成範に定められたところ、敵信西の子であるが故に穩當ならずとて皇后宮大夫藤原實房に改められてゐる。④

ついで捧起された平治の亂は、信頼六條河原に斬首、義朝は父の跡を追つて圓覺寺に葬られ、朝長美濃國青墓に自害して、あへなき源氏の敗北に終り、特に青墓は頼朝義經等が幾度か東海道通過に際して廻向しつゝ源氏再興を誓ひし深き思ひ出の場所となつたのである。以仁王の擧兵に應じて戰機諸國に動くや、戰場の幾多壯烈な出來事は、俄に多くの史蹟を出現せしむることゝなつた。先づ宇治の平等院に展開されたのが最初で、堂の一隅に

隱された二つの首が頼政並に子息仲綱と知れて後は、こゝを「自害の間」と呼ばれる樣になつたといふ。⑤木津に程近き光明山寺鳥居の邊は、長く後人をして宮の御最後に袖ぬらしむる恨みの地としてその名があらはれたのである。遠く東に眼を轉ずれば、木曾義仲の西上を決する倶利伽羅谷の合戰は、夥しい平氏將兵の戰死によつて陰慘の氣漂ふ地獄谷と化せしめたのであつた。源平盛衰記（卷二十九）に、

抑倶梨伽羅が谷と云ふは、黑坂山の峠猿の馬場の東にあり、其の谷の中心に十餘丈の岩瀧あり、千歳瀧と云ふ。彼の瀧の左右の岸より杼（トチ）の木多く生ひたり、谷深うして稍高し、其の木半ば過ぐるほどこそ馳せ埋みたれ、澗河血を流し死骸岡をなせり、無慙と云ふも愚かなり、されば彼の谷の邊には矢尻古刀兜の鉢、鎧の札（サネ）岸の傍木の木に殘り、枯骨谷に充ち滿ちて今の世までもありと聞ゆ、扨こそ異名には地獄谷とも名づけ、又馳籠（ハセコ）みの谷とも申すなれ

と戰蹟の凄慘なる光景を叙してゐる。勝ちに乘つた義仲

は、安宅を過ぎて間もなく、齋藤實盛の戰死を聞かされ、幼時を追想しなければならなかつた。部下に命じて首級を丁重に葬らせたが、土地の人々をも深く感銘づけた證據は、室町時代に入つて尙、實盛の靈が此處に出現したといふ記錄の見ゆるに徵して明かである、滿濟准日記（應永廿一、五、十一）載する記事は今迄屢々指摘された如く斯種史料の代表的なものである。

齋藤別當眞盛靈於二加州篠原出現一逢二遊行上人一受二十念一云々、去三月十一日事歟、卒都婆銘令二一見一了、實事ナラハ希代事也

夙に遺蹟として傳へられた古塚に、緇徒が夢想の靈託を刻して表示したものを考へられる。伊豆では石橋山が賴朝の興起により著聞し、後には當時奮戰の勇士等の墓が建てられたこと、吾妻鏡の賴朝伊豆參詣の條（建久元、正、廿）より知らるゝところである。

日來先御二參伊豆權現一處、於二路次石橋山一覽二佐奈田與一豐三等墳墓一御落涙及二數行一是件兩人治承合戰之時、爲二御敵一被レ奪レ命訖、今更被レ思食出其哀傷一之故也、

此事於二御參道一殊可レ憚之由御先達申行間如レ此云々

佐奈田與一義貞は、岡崎義實の嫡子として勇名を馳せたゞけ、敵長尾新六に討たれたことは當時の源氏方に大きな痛手であつた。豐三とあるのは或ひは與一の郎從文三家安を指すのでないかと思ふ。伊豆山中腹眞名鶴が崎なる所に鶯が巖谷と號する大岩石あつて、賴朝石橋山敗戰の時、一時隱れしところと傳へるのは、恐らく賴朝死後に云ひ出されたものであらう、⑥尙、近くの箱根山には、矢たての杉とて武士が出陣に際し、矢を射掛け吉凶を占ふた聖樹があつたが、⑦そのかみ華かなりし武人の門出を幾度か視つた歷史を祕めてゐたのである。この風は早く鎌倉時代より見られ、賴朝は奥州征伐のとき、藤原淸衡の勸請にかゝる高水寺鎭守走湯權現の神木に、鏑矢を二本射てゐる。⑧

やがて義仲粟津の露と消ゆるや、兵火の中心は一路西國に移り、まづ一ノ谷が修羅場となつた。歌人樂人等幾多優雅の名士共が平家の公達にあつたことは、悲しきこの戰蹟を土地の風光形勝に託して永久に後人の懷舊地た

らしめる所以であつた。たまゝ生擒となつた平重衡は鎌倉へ送られる途次、近江の長光寺（武作寺）に立寄り、柱に名籍を書留めたといひ、盛衰記は

今の世までも其の銘幽に殘れり

と報じたのである。鎌倉に於て頼朝に對面した上、再び京都へ戻され、遂に南都近くの木津に斬られ、頼長の先例を追ふて般若寺野の道傍の卒都婆も空しく屍を埋めたのであつた。これに反して維盛は平氏屋島に退けるのも、密かにこゝを抜け出で、熊野より補陀落に渡海すとて紀州に向つた、途中阿波國由木浦の逆屋の柱に歌を書き付けて最後の旅を悲しみ、紀州粉河寺では父重盛手跡の打札に涙を流しつゝ、高野を巡禮して那智に至り、濱王子の前より舟漕出し、沖の金島の松に名籍を書つけて入水したのである。しかし元弘の頃には維盛自殺せず、十津川に遁入せりとの傳說行はれたと見え、大塔宮吉野を遁れてこの地に入り給ひしとき、村人からその話を聞召されたと太平記は述べてゐる、

誠やらん大塔宮、京都を落させ給ひて熊野の方へ赴せ

給ひ候けんなるへ三山の別當定遍僧都は無二の武家方にて候へば、熊野邊に御忍あらん事は成難く覺候、衰此里へ御入候へかし、所こそ分内は狹く候へども、四方皆嶮岨にて、十里二十里が中へは鳥も翔り難き所にて候、其上、人の心僞らず弓矢を取事世に超たり、されば平家ノ嫡孫維盛へと申ける人も、我等が先祖を憑て此處に隱れ、遂に源氏の世に恙なく候けるとこそ承候へと語○下略

なほ參考太平記には天正本を示して、

天正本云、維盛子孫迄煩なしと傳承る、云々、熊野人口碑曰、紀州牟婁郡有下名二藤繩要害一處上、是維盛佯爲レ入レ海逃匿之地也、其山斗絶攀レ藤緣レ繩而上、故名レ之、至レ今維盛子孫在二紀州一以二小松一爲レ氏、其宅前有二維盛碑一今號二小松彌助一者又其裔云々

としてゐる。室町時代には、かやうに維盛の隱棲地と稱する碑が建てられてゐたのである。

さて義經に攻められた平氏は、やがて屋島に燒内裏の址をのこして海上遠く離れねばならなかつた。屋島の千

光寺梵鐘銘によれば、こゝに戰歿の諸將士濟渡のため、承久元年四月、蓮阿彌陀佛なる上人、京都六條町に來つて勸進を行つたことが知られるのである。

最後の源平合戰地たる壇浦には、建久二年閏十二月、阿彌陀寺建立の宣旨下り、こゝに幾多戰死者の靈は祀られたのである。（玉葉）讃岐の崇德天皇御陵邊に白峯宮が建てられたのも、このときであつた。「道ゆきふり」に、

赤まの關のにしのはしによりてなへの崎とやらむいふめる村は、都のうちの北にむかひたり、この關は北の山ぎはにちかく家とならびて岡のやうなる山あり、かめやまとてをとこ山の御神のたゝせたまひたり、その東に寺あり、阿彌陀堂といふ、安德天皇このうらにてかくれさせ給ひて後に、知盛の卿女の少將のあまとかやいひける人こゝにのこりとゞまりて平家の跡問ひけるを、のちにかの御菩提所になされて安德天皇の御尊像おはします、本尊は淸盛公のふく原の持佛堂の阿彌陀佛と申すなり、又小松のおとゞの本尊とて、さか佛もたゝせたまひたり、このたび安德天皇の御事、いつかゆめに見えさせ給ふことの侍りしほどに、たび〳〵御菩提をとぶらひ奉り侍りき

と悲しき由來が說明されてゐる。筑紫海道記によれば、遺影は天皇以下知盛・經盛・信基・敦盛・資盛・敎經、女房では大納言のすけの局を始め、四五人の方々が寺に安置されてゐると述べてゐる。かゝる悲劇の舞台であつた反面、こゝは神功皇后を祀り奉る社あり、昔、新羅への御出發地としてめでたき由緒をもつてゐたのである。同じく「道ゆきふり」に、

松原をはるかに行過て長門國府になりぬ、北はまとて東南にむきて家居あり、このさと一むらすぎて神功皇后宮の御社の前に出たり、御やしろは南に向たり、それより山のうしとらに出たる尾上をば、御かり山といふなり、このはまのわたにすさきの樣に出たる山侍き、くしさきといひて若宮のたゝせたまひたる所なり、其東の海の中に十餘町ばかりへだてゝ島ニむかへり、古の滿珠干珠なるべし、今はおいつへいつとかや申めりとある滿珠干珠の傳說は有名であるが、おいつへいつと

は、沖津邊津のことであらうか、壇浦の名も皇后の御事蹟に關係ありとして、

此うらを壇のうらといふ事は、皇后のひとの國たちたまひし御時、祈のために壇をたてさせ給ひたりけるより、かく名付けるとかや申なり、其時の壇の名にて侍るとて、御社の前のみちの邊にしめ引まはしたる石あり、此御社はあなと豐浦の都のおほ内の跡にて侍るとかや、此時御船つくらせ給ける木とて、ふな木の松などいふも侍るなるべし

と靈樹靈石の由來を說き、穴戸の地名については、

さても穴戸豐浦の都と申侍る事は、今の赤間の關と門司の關とのあはひは山のひとつにて、其中に、わづかにしほのみちひの道ばかり穴のやうにて侍るに、その岸の東西に人家しげかりけり、あなととはきていふなりけり、其を皇后のいくさの御舟とをりがたかりけるに、御舟よそひてのち、一夜のほどに、此穴戸の山引かれて、今のはやとものわたりになりぬ、このやまながら西の海中によりて島となれり、此島のむかひは

柳の浦とてむかしさと内裏のたちたげける所なるべし、今はそこをやがてだいりのはまともいふなり

と内裏の浦の說明に及んでゐる。なほ「道ゆきふり」には、安藝國沼田の里甕の天神社に近く戰蹟のあることを叙して、

田面のするのみちのべに、かた岡のやうなる所に、松や竹などしげくて草のだう一たてり、平家の世に沼田のなにがしとかやがこもりけるを、のりつねの朝臣のせめおとしける所と申めり、いまもしづが田返おりおりは、ふるきかばねなどほり出事も侍るに、矢のあな、かたなのあとさへみえ侍となん

といふから、里にしては珍しく後まで戰場の遺物が埋もれたまゝ傳へられてゐた狀態を知るが、果して如何なる戰ひであつたかは知る由もない。只これも平氏沒落の哀史を物語る一つのエピソードであつたらしいことを窺ひうるのみである。

稍々時を經て惹起された承久の亂は、戰禍の京中に及ぶこと少く、京都方は卿相以上皆、都以外の地で斬られ

た中に、中御門宗行遠江國菊河宿の柱に詩を書き留めたのは、分けて有名である。同じことは、およそ一世紀を閲した元弘元年七月、日野俊基、朝廷御討幕の謀に參加せる次第洩れて鎌倉に送らるゝ時、繰返へされたのである。後醍醐天皇笠置御遷幸に始まる兵亂は、漸次各地に波及し、尊氏の叛逆と相俟つて全國に戰場を現出せしめた。賊の兵火に化人の作と云はれた笠置の石佛も燒け佛となり、寺は永德元年に至るまで全くの戰蹟地として荒廢に任されたのである。楠木正成また一坦赤坂城を退いた上、再び金剛山に據り、夥しい北條の大軍を引寄せたが、戰後金剛山麓、東條谷の路の邊は矢の穴刀の創ある白骨收むる人なく苔に纏はれ、累々として散亂してゐたのである。[9] なほ赤坂の城攻めには武藏國住人入見入道恩阿、相模國住人本間資貞、其子資忠が、戰死記念の筆蹟を天王寺石鳥居に書遺してゐることも戰亂の世に見られた悲壯な遺蹟の一つであつたとせられよう。正平七年の頃畏くも光嚴法皇は、高野御參詣の途すがら、難波浦を南へ進ませ給ひしとき、はるか東方の連山に御目を止めさせ給ひ、

道ニ休メル樵ニ山ノ名ヲ問セ給ヘハ、是コソ音ニ聞ヘ候金剛山ノ城トテ、日本國ノ武士トモノ幾千萬ト云數ヲモ知ス討レ候シ所ニテ候ヘトソ申ケル

法皇これをきこしめし、深き感慨にふけり給ふた。[10] かくて千早の攻に、北條勢が荏苒日を送るうち、京都六波羅は四方に官軍を受くるに至り、東走を企てしも成らず。して近江番馬峠に全滅し、北條仲時以下四百數十人、附近の長光寺過去帳にその名を留めることゝなつた。各地の探題守護皆夫々の地に最後を遂げたが、越中二塚の浦では、越中守護名越時有、舍弟有公甥貞持等一族大敵を受けて滅亡の後、靈なほ出沒して旅人を惱したと傳へられ、太平記(卷十一)は、その模樣を詳さに叙述してゐる。其後建武中興を經て再び戰亂の時代に入り吉野方は諸方に離散するの悲運に際會したが、就中金崎の落城は悲慘を極めた。太平記(卷十八)が、

されは今に到迄、其怨靈共此處に留て、月曇り雨暗き夜は叫喚求食の聲啾々として人の毛孔を寒からしむ

と云つたのは、單なる文辭上の形容だけではなかつたと思ふ。新田義興が武藏國矢口渡で謀殺されたときは、雷によつて敵を殺し、毎夜渡へは怪物とあらはれて往來の人を惱したから、附近の人々新田大明神の祭祠を創め靈を鎭めたのである。其他延元三年北畠顯家が足利方と戰つた八幡には、桃井直信直常兄弟の合戰せし桃井塚が記念され[11]、享德四年六月、武藏國岡部原に展開した關東公方成氏と幕府方今川範忠の激戰地は、のち人馬の骨を以て多數の墳墓が築かれたのであつた。[12]

以上手近の文獻に徵して知らるゝ戰蹟の大體を列擧し來つたが、中世戰亂に伴ふ新史蹟の發生は、蓋し源平合戰に於けるものが最も深く印象づけられた樣であつた。それは一つに平家物語・源平盛衰記の如き秀れた語り物が作られた爲と、源平合戰に戰場となつた處は、其後再び兵亂の中心となつて繰返し回想が行はれたことの二つに歸するであらし、殊に中世に於ける民間演藝の發達と僧侶の敎化行脚は兩々相俟つて史蹟の「由緒」を興味深く庶民達に聞かせる機會を多くした。これによつて聽衆は

ありし昔の戰場の模樣をまざ〳〵と腦裡に描き、それが互の口傳の間に、人の好奇心をそゝる部分は益々誇張して語られ、文學的な修飾をもつて恰も目擊者の言葉の如く詳細且鮮明になつて行つたのである。謠曲の修羅場はかくして成立したのであつたが、これについては既述した拙稿[13]に讓り、今は割愛しよう。

たゞさうした戰場物語を說いて歩いた者の存在については、序乍ら若干の史料を揭げて說明しておきたい。文安六年五月二十日比、若狹國より上洛した二百餘歲と稱する白比丘尼の如き、人間盛衰の歷史を語る者ではなかつたかと思はれ、康富記(文安六、五、廿六)に、

諸人成二奇異之思一仍守護召上歟、於二條東洞院北頰大地藏堂一結二鼠戸一、人別取二料足一被二見一云々、古老云、往生所レ聞之白比丘尼也云々、白髮之間白比丘尼ト號歟云々、官務行向見レ之云々、而不レ可レ然之由有二巷說一之間、今日不レ向二若狹國一云々

とあるから、可成り以前より知られ各地を歩いてゐたと考へられる。然るに同書はまた、

廿七日丙午、晴或說云、自二東國一比丘尼上洛、此間於二三條西洞院北頰地藏堂一致二法花經之談義一云々、五十バカリノ比丘尼也、同宿比丘尼二十人許在レ之云々

との巷說を載せており、五十歳位の老女が、說教談義に託して亡靈の語れるところを取次いだといふのが事實に近く、さうした比丘尼は少なからずあつて、一つの團結を形成してゐたらしいのである。中右記(天治二、五、四)に、

入レ夜道心比丘尼名不レ知レ人來、先誦二和讃一其聲甚美聞レ之自發二道心一次高聲念佛事了問レ之、本是河內國住人久爲二人妻一不レ生レ子、齡過二五十一乞レ暇二於夫一出家爲レ尼常在二天王寺西門一偏專二念佛一也、今年已六十一、每思二世間無常一彌以發心也、近日有二要事一暫在二京都一也

と見ゆる比丘尼の如き、和讃を美聲に唱ひつゝ參詣人を魅惑せしめて糊口を繫いだ者が戰亂を機として俄に歷史的な內容をとり入れる樣になるのであらう。元應三年四月には盲人の琵琶法師、後伏見花園兩上皇並に女院の御前に召されて平治平家の物語を彈するに至つてゐるから、⑭鎌倉末葉には戰場の昔語りが廣く行はれてゐたことは想像される。室町時代に入れば、比丘尼の御所に祇候する記事が明かにあらはれ、⑮保元物語聽講を所望せられた話が載せられてゐる。⑯卽ち琵琶法師の增加に伴ひ、一方ではこの頃如何にも實感を伴ふせりふの巧みな談義僧の出現が目立つてくる。足利直義には、妙吉侍者常に側にあつて異國本朝の物語を聽かせたが、⑰看聞御記(應永廿三、六、廿八)は、

大光明寺客僧、有二物語上手一云々、自二長老一被二擧申問一被召レ之、酒宴御肴語レ之、凡辯說吐レ玉、言詞散レ花聽衆感歎斷腸

と稱せられた物語名手のことを記し、別に應永廿七年四月九日條に、

常順檢校常存弟子寶泉許へ細々來云々可二推參一之由申レ之間召レ之、物語上手也、以レ之爲レ藝平家ハ下手也、則物語申、誠殊勝其興不レ少

と物語りを家藝とする檢校(琵琶法師ではない)の存在を說いてゐる、中世に於ける合戰繪卷の出現もかうした要

求に應じてあらはれたものと思はれるが、これは別の機に述べることゝしよう。

其後戰國の紛亂期を經て近世の太平な時代に入り、僧侶の活動も衰へるとともに、中世的な史蹟に關する由緒語りは全く演劇化し、別に新なる近世大名の發祥を物語る數々の地方遺蹟が誕生した。さうしてこれらは僧侶に代る儒家達の實證的な研究により、新たな市民社會への教材となつたのである。

註①滿濟准后日記、應永三十四、二、一
②清水寺緣起
③豐臣秀吉公譜
④吉記、壽永三、四、十五及び同十九
⑤源平盛衰記、卷十五
⑥相州兵亂記、卷三
⑦廻國雜記
⑧吾妻鏡、文治五、九、十一
⑨太平記、卷九
⑩同　卷三十九
⑪同　卷十九
⑫廻國雜記
⑬室町時代の佛教教化と歴史意識（支那佛教史學第六卷第二號所載）の第四章參照
⑭花園院宸記、元應三、四、十六及び同十七、同廿九
⑮親長卿記、文明九、十一、十一
⑯太平記、卷二十六

四　聖地史蹟の巡歴

歴史的遺蹟の出現が、既述の樣に活潑を極めた中世にあつては、自らこれを巡訪せんとする氣運も強く醸成されたのであつて、一方には行脚僧による巡禮の宗教的意義づけがその流行を一段と促したのであつた。元來わが國の遺蹟について傳承される由來譚には地理的移動をその構想の基礎とせるものが少くなく、その理由は蓋し、神聖なるものゝ據つて來るところが地理的にも遠隔の彼方にあるとする古代信仰にあつたのである。堀一郎氏の所謂「遊幸思想」とも云ふべき、神の臨幸、遊歴に對する古代人の信仰が、中世の歴史記念物發生には種々な形をとつてあらはれ、就中寺院緣起の如きはその爲、靈佛貴人の遍歴譚を豐富にとり入れ、以てその權威と神聖さを誇示するに努めたのであつた。從つて相互の遺蹟間に

は種々の傳承的關係が生じ、是等を歴訪することに宗教的な効果と喜びが感ぜられたのである。

いま事例を歴史的に古く溯つて尋ねるならば、清和天皇脱履の後、頭陀に託して攝津・大和・山城諸國の名山佛壇を巡禮されしことあり、ついて宇多・圓融・花山の三法皇もこれに倣つて行脚を試み給ふた。他方、平安中期よりは支那の五台山巡禮の影響もあつて、寛仁二年、阿闍梨定心、南都七大寺巡禮を行ひ、治安三年藤原道長同じくこの企てを實行した。降つて大江親通は嘉承元年秋及び保延六年三月の二回に渉り南都七大寺を巡歴し、有名な南都七大寺日記及び南都七大寺巡禮記私記を遺した。白河天皇の御代には、平等院の行尊大僧正、觀音靈所三十三所巡禮を始め、百二十日を費してその望を遂げ、覺忠また七十五日を以てこれを全部巡回した。かくて巡禮の風は漸次中世人の間に廣く親しまれることゝなり、梁塵秘抄(巻二)が掲げた

○四方の靈驗所は、伊豆の走井、信濃の戸隱、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室生と讃岐の志度の道場とこそ聞け

○筑紫の靈驗所は大山四王寺清水寺、武藏清瀧、豐前國の企救の御堂など、筥門の本山彦の山

○根本中堂へ參る道、賀茂河は河ひろし、觀音松の下り松、ならぬ柿の樹、宿禰師坂、滑石飲、四郎坂、雲母谷、太田袈裟の池、あこやの聖が立てたりし千本の卒都婆

○觀音驗を見する寺、清水石山長谷のを山、粉河近江なる彦根山、ま近く見ゆるは六角堂

○大師の住所はどこ〳〵ぞ、傳教慈覺は比叡の山、横河の御廟とか、智證大師は三井寺にな、弘法大師は高野の御山にまだおはします

○聖の住所はどこ〳〵ぞ、箕面よ勝尾よ播磨なる書寫の山、出雲の鰐淵や目の御崎、南は熊野の那智とかや

○聖の住所はどこ〳〵ぞ、大峯葛城石の槌箕面よ勝尾よ播磨の書寫の山、南は熊野の那智新宮

の歌の如きも、別に確と定められた譯ではないが、夫々の名所寺刹をつなぐ一つの巡歴路が開かれてゐたと見て

よいであらう。根本中堂といふ一つの靈所へ詣るにしても、その途中に歌にある様な數々の由緒ある歴史記念物が點在し、それらをたづねつゝ遍歴しゆくところに宗教的な有難さと喜びが感ぜられたのである。また或る場合は觀音驗を見する寺といふ共通概念によつて、清水・石清水・長谷・粉河・彦根・六角堂の諸寺を結び、是等を巡次參詣しつゝ觀音の慈悲を遍歴的な廣さに於て體得しようとする試みもあらはれた、これはまた實に鎌倉時代の新宗教運動に對抗して、顯密の僧侶達が俗衆達に薦めた新たな布教對策でもあつたと思はれる。たゞ三十三所巡歴の如きは當時可成りの日數と勞苦を伴ひ、而も

三重の瀧に七日うたれ、那智に千日　○金勝院源院天正本北條家西等百日とす

篭て三十三所の巡禮

をする様な修行は①到底一般人が全部なしうる譯でなく、爲に是等のうちの若干を限つて小範圍の地域に巡拜コースを構成し、地方人の便宜を計つたことも少くなかつた、詞花和歌集に「東山に百寺をかみけるに時雨しければよめる」云々の左京大夫道雅の歌があるから洛東に百寺參拜の行はれしを知るであらう、治承二年十一月三日、朝廷では泰山府君を祭るため、洛外七ヶ靈所たる河合・耳敏川・東鳴瀧・西鳴瀧・松崎・石陰・大井川等に使を出さしめられたが、②當時既に七觀音詣では行はれて後白河法皇③や藤原實房④の巡歴が知られた。室町時代に入れば七觀音めぐりいよ〳〵盛んとなり、⑤又七佛藥師や洛中三十三所觀音廻りも始められた、其他地藏廻りは特に庶民の關心を惹き易く、源平盛衰記(卷六)に見ゆる西光法師の七道の辻毎に地藏を作つて拜み歩いた話は有名である。室町期に於ける京都の六地藏廻りは、資益王記(文明十四、七、廿四)によれば、西院・壬生・八田・屋禰茸(星光寺か)清和院・正親町西洞院の各所であつた。木幡の廻地藏・三つの地藏・桂の地藏なども當時の巡禮に重要な一目標となつてゐたこと桂川地藏記や大乘院寺社雜事記から明かである。鎌倉時代初頭には京都周邊の塔婆めぐりが流行し雜踏を極めたが、⑥かうした路傍の卒都婆や野ざらしの石碑石佛を順拜することは一層手輕で容易なところから、庶民達にも喜んで迎へられた。一方名所探訪も可成り行はれてき・

た模様で西行法師や頓阿はその代表者であるが、前章に述べたから爰には論述を避けよう。

以上雑駁乍ら、吾人は中世人の歴史記念物に對する關心が如何に尋いものであつたかを說いたつもりである。思ふにそれは畢竟、當代人の生活が現在よりも遙に深くその恩惠を受けてゐたからであらう。第二次世界大戰中はもてはやされた楠公遺蹟が終戰と同時に殆んど世人の顧みる者もなくなつたといふが如きは、眞にそれが國民生活と結合せず、湯山や精神運動の目標といふ皮相なものであつたことを暴露しており、遺蹟に對する一種の冒瀆とさへ云はなければならない。史蹟は決して流行物ではない。中世人の育てた歴史遺蹟は實にそれから宗教も倫理も歴史も文學も教へられた文化的源泉であり、教育機關の不完全なりし當時一般民衆が賴らなければならない唯一の教材であつた。

今や平和の光明は頭上に輝き、「歴史」より忘却されんとした昭和日本は、漸く本然の姿を見出して苦難多き將來への道を歩まんとしてゐる。それにつけても吾人は戰前迄に傳へられた歴史的記念物に對し深き懺愧の念を致すと共に、四年に渉る戰爭が生んだ東亞各地の歴史的記念物をして永く日本人反省の史料たらしめたいと思ふのである。

註①太平記、卷五
②山槐記治承二、十一、二
③玉葉、文治元、三、廿七
④愚昧記、仁安三、五、廿一
⑤室町時代に知られた七觀音は塵袋抄によれば、六角堂、革堂、河崎、中山、長樂寺、六波羅密寺、清水寺の七靈驗所で、又看聞御記に極めて頻繁に見える七觀音詣では、烏丸西、四條坊門北にあつた七觀音院を指してゐる。山城名勝志(卷十四)は、

寺說云號二如意輪山淨佛寺一本尊如意輪一尺餘弘法大師御作圓光內二有二六觀音一

といひ、蒐藝泥赴(第三)に、すべて七體の名稱を

大悲觀音 千手 大慈觀音 聖觀 獅子無畏觀音 馬頭 大光普照觀音 十一面 天人丈夫觀音 准胝 大梵深遠觀音 如意輪 不空羂索觀音

と記してゐる。さうしてこの方が七所觀音より古いら

しく、吾妻鏡（建長二、十二、十八）に、鎌倉七觀音堂が見える點よりしても、當然京都にこの頃あつたことが推測される。事實、康富記もその歴史の百年以上も古いことを云つてゐるのである。なほ看聞御記の左の記事は緣起を舁いだもの乍ら、當時の信仰を知る興味深い史料である。

永享七年六月廿五日、雨氣不レ晴、入江殿御新七觀音七人七度參、是之人三人安久居侍共參、新滅成就念願七度詣必有レ驗事也

⑥山槐記、治承三、二、十二、同廿三　同廿四　同廿五　同廿九、治承四年三月廿一、同廿二　同廿三　各條に詳しく見えてゐる。

（本稿につき、西田直二郎先生より御校閲御指導を賜つた。厚く感謝申し上げる次第である。なほ私としてはこの論文を上代より說き起し、中世に入つては史料を出來うる限り豐富に揭げ、終りの巡歴の章についても詳論したい積りであつたが、餘りに長篇に涉る爲一先づこの樣な形で諸賢の御高評を仰ぐことにしたのである。）

（昭和二十、十二、八）